

ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相①

今回からは、本連載の主題である「天理教の異文化伝道と『文化』の『翻訳』」について、ヨーロッパとくにフランスでの天理教の伝道事情や歴史を事例として取り上げながら論を進めていく。連載の第1回(2022年9月号)でも述べたように、天理教という宗教伝統に備わっているとされる「文化」が、異文化伝道の文脈で伝道する側によってどのように語られ、そしてその過程でどのように「翻訳」されるかに注目するのがその目的である。

なお、天理教とヨーロッパ伝道の関わりについては、本誌においてこれまでに様々な内容が紹介されている。とくにフランスについては、田中久代による天理日仏文化協会こども日本語講座の取り組みの紹介や、藤原理人によるライシテと天理教のフランス布教についての考察など、すでに当事者の貴重な知見を紹介する記事が掲載されている。本連載でも、それらの内容を適宜参照しながら話を進めていきたい。

ヨーロッパにおける天理教の伝道

フランスでの伝道の話をする前に、まずはヨーロッパにおける天理教の伝道について概観しておきたい。ただし、ヨーロッパ全体は広範囲にわたるため、ここではあくまで一般的に「西ヨーロッパ」と言われる地域に限定することを予め断っておく。

さて、現在ではEUから離脱したため、ヨーロッパの一部として捉えることに異論のある読者もいるかもしれないが、天理教のヨーロッパ伝道の嚆矢となるのは、天理教船場教会(後の船場大教会)の英国布教である。これについては、これまで様々な書籍や機関誌等を通じて詳細に紹介されている通り、船場教会に所属する赤木徳之助、高見正蔵、正信藤次郎の3名の布教師が1910年に派遣され、その間赤木の帰国などもありながら、正式には1913年まで英国の首都ロンドンで布教を展開した。

船場の英国布教の後、組織的な動きとしては第2次世界大戦後まで大がかりな動きはなかった。戦後の動きで特筆すべきこととしては、まず中山正善2代真柱の海外巡教が取り上げられるだろう。既に広く知られていることではあるが、2代真柱は戦後の期間では1951年～1966年にわたり、合わせて8回海外巡教に赴いている。その1回ごとの巡教では、一つの国や都市だけではなく複数の国にまたがって渡航しており、その範囲はアジア地域、北米・南米大陸、ハワイ、アフリカ大陸にわたる(森井 2008: 522-523)。

その8回の海外巡教の内、7回の巡教でヨーロッパ諸国の首都や主要都市を訪問している。その目的は、ヨーロッパ各都市の視察、柔道関連の用務、また学術会議における研究発表など多岐にわたる。巡教の内容については、『たねまき飛行』(1952年)をはじめとする2代真柱の数ある自著を含め、詳細な記録が残されている。もっとも、2代真柱の巡教の時点では、ヨーロッパとの関わりは主に2代真柱の個人のものに留まっており、またその主たる目的も直接的な布教活動ではないことから、戦後のヨーロッパ伝道の黎明期と位置付けられるだろう。

この間、1961年4月26日の「論達第二号」の発布によって、

天理教の海外伝道が本格的に推し進められていくこととなる。その論達の発布に前後して、天理教教会本部の機関誌『みちのとも』では、2代真柱自身が海外布教について言及したり(1960年12月号、1961年2月号、3月号)、また論達関連の特集記事が掲載されていたりする(1961年7月号～12月号)。

しかし管見の限りでは、2代真柱の著書や『みちのとも』の記事の中では、ヨーロッパに教会本部の拠点を設立するような動きは記されていない。しかし、後に1970年に設立されることとなる「天理教パリ出張所」(現在の「天理教ヨーロッパ出張所」)の設立経緯を考えると、2代真柱のヨーロッパ巡教はその設立と切っても切れない関係にあることに気づかされる。

それを辿るには、1960年の7月7日～10月15日にかけて2代真柱がヨーロッパへ巡教した際に随行していた、天理教山名大教会4代会長であり著名な宗教学・天理教学者であった諸井慶徳の存在が欠かせないだろう。自らも山名大教会の所属であり、後にパリに留学生として派遣されることとなる鎌田親彦の述懐によれば、2代真柱がドイツのマールブルグで開催された第10回国際宗教学宗教学史学会に出席した際、諸井が道中を随行していたが、体調不良のため途中で病に臥し、マールブルグには行けずにパリで療養していたという。その後、2代真柱の随行も志半ばで断念して、同年の8月25日には日本に帰国したとされる(鎌田親彦へのインタビュー、2014年11月11日)。

諸井慶徳の夫人である諸井春子の述懐によれば、諸井慶徳は病中に、「御本部の要職は全部お返しさせていただいて、一布教師に身を落ちきらせていただき、身上御守護いただいたあかつきには、フランス布教へ立たせていただきます。」と話したという(諸井 1962: 7)。また、同夫人が別の場所で述べた内容によれば、諸井が1960年7月にパリで療養した際に春子夫人に宛てた手紙の中で、天理教のヨーロッパ伝道の足がかりとして、また2代真柱がアフリカに巡教する際の中継地点として、パリに拠点を設立したいという思いを語ったと言われる(渡辺 1988: 452)。

ヨーロッパの中でなぜパリであったのかについては、鎌田によれば、ヨーロッパで布教をする際、地理的・文化的観点から、イギリスやドイツではなく、フランス、特にパリからだと思った、と諸井が語ったという(鎌田親彦へのインタビュー、2014年11月11日)。上記の諸井慶徳自身の言葉も含めて、直接本人が書き記したものは見つけられていないが、諸井と極めて近い関係にあった複数の人物の証言からも、諸井慶徳がヨーロッパ伝道に強い思いを持っていたことは疑う余地がないだろう。

[引用文献]

諸井春子「偲び草」、天理教校編『道を求めて―諸井慶徳先生追悼録』天理教校、1962年。

中山正善『たねまき飛行』要書房、1952年。

森井敏晴『天理教の海外伝道―「世界だすけ」―その伝道と展開』善本社、2008年。